

高橋由一における石版画と山形県 一手彩色石版画『三県道路完成記念帖』を通して一

◎新関伸也 (滋賀大学教育学部助教授) / 青山光佑 (山形大学教育学部教授)

1 高橋由一と石版画

高橋由一(1828~1894)は、文政11(1828)年、下野国佐野藩士の嫡子として江戸に生まれ、8歳より藩主堀田正衡の近習を勤める。藩主正衡は蘭学・洋学に興味を示していたこともあり、高橋由一(以下由一)の西洋の事物への興味や関心は、早い時期に培われていたと言える。

のちに「嘉永年間、或ル友人ヨリ洋製石版画ヲ借り受ケ観タリシニ、悉皆真ニ逼リタルガ上ニ一ノ趣味アルコトヲ発見シ」⁽¹⁾と回想しているが、20代の由一が「洋製石版画」の写実的表現に驚愕したことは全くの偶然ではなく、彼を取り巻く環境や交友関係に依る所が大きい。とはいえ、狩野派の画法を捨て洋画を学ぶ契機となった意味では「洋製石版画」の存在は無視できないものがある。この時由一が見た「洋製石版画」の詳細は不明で、墨版の単色か色刷りかはもとより、画題や作者すら明らかではない。嘉永年間の国情を考慮するとオランダから長崎を経て渡来した通俗的な風景か風俗画の複製で、それほど質が高いものではなかったと推察される。⁽²⁾

このように由一に衝撃を与えた内実は、西洋画特有の写実表現にあり、作品や画家の有名無名は二次的な要素であったと言えよう。それは、西洋石版画の遠近法や明暗による写実的な表現方法に「真ニ逼リタル」ものを発見したのであり、伝統的な狩野派の筆法では得られない立体感、質感、遠近法など事物の捉え方、描き方への驚愕であった。由一の視覚的リアリズムは、対象を実物のように平面に再現する写生やその方法を意味していた。

慶応2(1866)年、由一は38歳にして横浜在住英国人C. ワーグマンに入門し本格的に洋画技法を習得するが、画題追求は前述の通り副次的であった。対象を実写する視覚的リアリズムの追求こそ己の責務であると自覚し、実利にかなう西洋画家・画工としての研鑽と洋画の社会的認知を得るための努力を積み重ねる。

由一は明治8(1875)年47歳の時、松田緑山が東京日本橋呉服町に設立し

た石版印刷所「玄々堂」にて、「日吉丸の図」「ナイヤガラ瀑布図」「華嚴滝図」「霧降滝図」「観瀑図」を制作する。この「玄々堂」で石版画の技術・技法を短期間にかつ集中的に習得した経験は、後の『三県道路完成記念帖』発刊の基礎となる。

2 県令三島通庸と画工高橋由一

山形県ゆかりの大半の作品は山形県令三島通庸(1835~1888)の依頼によるものであった。三島通庸(以下、三島)は薩摩藩士より内務官僚に抜擢され、山形、福島、栃木県令を歴任し、警視總監となる。この間、福島事件鎮圧、保安条例施行等で自由民権運動弾圧に力を尽くす。特に、三県令時代の土木事業は顕著であり、地方交通路の整備拡大を一気に押し進める。全国の陸路整備は明治政府にとって、殖産興業や富国強兵に資する物流、兵力輸送の観点から急務であった。また一方で会津・庄内など旧幕府勢力や農民一揆の勃発した地域を統治し、民意を中央集権体制に組み入れる責務を三島は担っていた。三島は大久保利通による東北統治策と藩閥の後盾を得ながら、道路開発が政策上急務であることを自覚し職責を果敢に進める。反面、強引な道路敷設や土木工事への動員、増税、民権運動弾圧により庶民から「土木県令」「鬼県令」と憎悪された存在であった。

これらの土木工事の過程や完成を報告、記録する上で、文字より絵画や写真の視覚媒体が優れていることは昨今も変わらない。三島は早い段階からその重要性を理解し、山形七日町に東北で最初に開業した写真師菊池新学(1832~1915)に県庁前、新道、建物、隧道などを撮影させる。当時撮影した写真が現在85枚確認されている。⁽³⁾

同様に三島は、洋画による記録を由一に依頼する。由一は明治3(1870)年民部省を経て、大学南校の教官を歴任し、宮内省関係の仕事や万国博覧会出品で活躍した絵師として知名度があったことや、薩摩出身の高崎正風(1836~1912)⁽⁴⁾の斡施により三島の知遇を得ている。

3 高橋由一来県目的

前述した経緯から由一は山形県に明治14(1881)年から明治20(1887)年までの6年間で計3度来県することになる。その主たる職務と目的は三島の委嘱による油彩画制作と石版画帖作成のための写生旅行であった。

1回目の来県は明治14年、由一53歳の時である。同年8月から10月上旬までの約1ヶ月山形に滞在、明治天皇東北巡幸時の天覧とするため「大久保利通像」「上杉鷹山像」「栗子山西洞門」の外、県下新道の油彩画を計10点描く。

天覧は同年10月3日「栗子山隧道開通式」に臨んだ際、傍らの「御休所」で行われ、由一の外、菊池新学、菅原白龍⁵⁾(1833~1887)が列席する。菊池新学は前年に「御用写真師」の称号を許され写真を6枚展示した外、写真アルバムを献上する。さらに巡幸に随行して写真撮影の下命を受ける。同時に、菅原白龍は、完成間近の栗子隧道付近12景を描き画集「栗嶺奇観」を開通式場で献上している。このように東北巡幸「栗子山隧道開通式」の天覧は、画家・写真家による作品披露の観があり、その展示は三島の依頼によって周到に準備されたものであった。

東京に戻った由一は同年12月、「山形地方写生願 山形新開図誌トシテ刊行希望」⁶⁾を三島宛に提出する。この書簡は「大土木ノ御成功ニ至り候テハ一目シテ驚愕セサルナクノ新世界ニ在ルカト疑カハシムルニ到ル」と三島の事業に対し驚きと賛辞を述べながら、「真景ヲ写」し『山形新開図誌』の出版を積極的に働きかけている。このことにより明治17年の写生旅行が実現、三県に跨る『三県道路完成記念帖』(以下、記念帖)の発刊に至る。菅原白龍が明治天皇に献上した画集以上の内容を石版画制作で意図していたに違いない。

2回目の来県は明治17(1884)年、由一56歳の時である。記念帖作成のために、同年7月末より10月までの約2ヶ月間、県内土木工事現場を広く歩き回り新道を写生をする。この経緯は「明治十七年栃木県ヨリ特命、山形

福島栃木三県下新道景色石版画揮写上納右三帖トナシ表装ノ上宮内省外諸官省皇族大臣下へ配付ス、重野安繹、序文、岡千仞の抜文アリ」⁷⁾と述べられており、三島が己の土木事業を皇族・高官に紹介することを目的にしていた。結局、栃木・福島・山形の新道を合わせて約200枚描く大写生旅行となった。当初企画した『山形新開図誌』をはるかに凌ぐ枚数となり、三県に渡る三島の土木事業の全容を記録することとなる。

山形県には会津より大峠を経て米沢に9月1日到着。米沢より山形、楯岡を経て清川より鶴岡に入り、10月3日湯野浜温泉に滞在。さらに酒田から吹浦を経て県境に至り、再び引き返して金山から雄勝峠付近を写生、楯岡より東根、関山峠を越え、10月20日宮城県作並温泉に投宿する。この写生旅行に7月より随行先導したのが福島県七等属、伊藤十郎平⁸⁾である。伊藤が三島に逐次報告した文書により、上記山形県内の由一の旅程、写生の様子を知ることができる。伊藤は先導・周旋役の外、予定以外の写生がある場合等逐次報告の義務を負っていた。由一の写生旅行は伊藤なくしては実現不可能であり、記念帖完成に至るまでその人脈を生かし仲介や滞在の労をとる。

3度目の来県は、由一59歳の時で明治20(1887)年10月から翌年1月までの3ヶ月間の逗留となる。依頼された肖像画制作を目的とした来県で私的な旅行であった。すでに三島は警視總監に就き、地方を離れたこともあり、公務に絡む依頼はない。山形七日町の照井泰四郎⁹⁾宅に宿泊後、北村山郡楯岡村に滞在、同郡長寒河江季三の亡父「寒河江平陰像」、故「小池虚一齊夫妻像」他、西・北村山郡の豪商富家の肖像油彩画13面の注文を受け、内3面を完成させる。照井が肖像画の募集広告を『出羽新聞』¹⁰⁾に掲載したことによる依頼が何点かあったと予想される。しかし、これまでの来県で知遇を得た人物や、世話になった人物の肖像画制作を中心とした可能性が高い。翌年1月12日帰京し、山形で受注文した肖像画を2月まで描いて納入している。

この3回目の来県は単なる収入目的だとは思えない。先取の気質や実直な人情、土地柄に親近感を覚え、旅の世話になった人々の肖像を描いて返礼したいという素朴な心情が多分に働いていたと言えよう。鉄道が全国に敷設されていない時代、馬車を乗り継いでるばる東京から営業目的だけで来県するとは到底思われぬのである。

これら3度の来県による由一の県内宿泊数は、のべ半年にのぼり、彼の画歴においても無視することのできない滞在期間である。県内の写生旅行で由一は、数々の土木工事を目の当たりにし、三島の開拓者精神に驚愕と共感を覚えるとともに明治の新たな息吹を感じ取ったと思われる。西洋画先駆者の己の立場を三島の果敢な開拓魂に重ね合わせ、その姿を山形の景色の中に見い出し洋画普及の励みとしたことであろう。

4 手彩色石版画『三県道路完成記念帖』

明治17年の東北旅行の写生に基づき完成した手彩色石版画『三県道路完成記念帖』は、翌年12月、東京日本橋石版印刷所「玄々堂」より50部出版される。山形、福島、栃木県の3県の画集が分冊になっており、明治初期の土木工事記録としての価値だけでなく、由一の画業を理解する美術品としても貴重である。発行数30部の内、3県3冊の1函画帖として128図がすべて揃っているのは山形県立図書館、山形大学附属博物館、国立国会図書館、東京国立博物館に所蔵されている4部のみである。なお、山形大学附属博物館蔵は石版画集『三県令道路改修記念帖』と銘があるが、通称『三県道路完成記念帖』と呼ばれている。

その記念帖に付録の序文は、前述の重野安繹の名で「則令畫工高橋由一繪之。由一就其地。一一模寫。又自鐫之石版。刻画精巧。典筆墨毫髮無異。山形五十五圖。福島五十三圖。栃木二十圖。共計一百二十八由圖。由一遂製為帖子」⁽⁴²⁾とあり、128図の内、山形県の図が55図と半数近くに及び、山形における土木事業の規模の大きさをこの記念帖からも知ることができ

る。

由一は、油彩画や肖像画の画面に署名や制作年代を入れることが殆どない。そのため現存する記念帖も序文がなければ由一の作品という立証は難しく、『高橋由一履歴』や書簡に頼るほかない。その意味では安野の序文は由一画の裏付けとなる。由一の無署名について原田光は「国家有用のことを第一のことと考えるこの私を、国家にとって平民画工とむしろ誇り高く自己表現したわけである。無私の私といったらいいのか、それが結果的に、無署名の署名となって絵に現れた」⁽⁴³⁾という公僕的な資質を由一に見いだしている。写真が無署名であると同様に職人的無名性として洋画を位置づけていたことは、日本における近代美術の成立を考える上でも興味深い。

さて、山形県関係の図を概観すると、新道、隊道、橋、切り通しが殆どであり、建築物や市街図は少ない。これらは、土木工事の記録写真的な要素を持ち、遠近感を意図した構図となっている。人物や人力車、荷車などを取り入れ画面に変化を持たせ、实景の尺度の理解に資するものとなっている。特に様々な旅姿をした人物の画面効果は大きく、由一はここに画面構成の真骨頂を発揮している。記念帖の人物を詳細に検討した小形利彦は、登場人物を4つに分け、「旅姿で描かれた一人ないし二人の人物を高橋由一と伊藤十郎平、和服・洋服を着用、時に帽子をかぶり、ステッキや洋傘を持ってかつぶくのよい体格で描かれている人物を三島通庸の可能性があり」と三者の関係を意味する興味深い分析をしている⁽⁴⁴⁾。

一方、新学による撮影写真と同じ構図の「山形県庁」「酢川にかかる常磐橋」「北村山郡関山村字小屋ノ原新道」は、それぞれ下図、石版画、油彩画の3枚が現存している。新学の記録写真はモノクロで当時の様子を正確に撮影しているが人物の往来や自然の色合いがないため生気に欠け、無機質な印象を受ける。その点由一による油彩画は、色彩及びマチエールに加え、人物や人力車の配置によって画面の遠近や生命感が増し、写真に比

較してより印象深い作品となっている。視覚的印象の観点からは由一の油彩画に軍配を上げねばなるまい。このように由一は、実写以外に写真を利用して描いたことが十分予想できる。このことから由一は55景全部に赴き写生しなかった可能性も生じてくる。滞在先の写真師照井泰四郎の撮影した写真を見ながら、何点かは描いていたことが推察できる。県内滞在2ヶ月間で交通の不便な各地に赴き55景の全景実写は当時の事情から難しいと言えよう。

さて、記念帖制作を知る上で貴重な作品が現存している。記念帖の下図とされた明治17年作の水彩画「東置賜郡糠野ノ目村松川橋」や「北村山郡関山村字小屋ノ原新道」などを含む「山形景観画集（石版画下図）」53枚が山形美術館に保管されており、石版画と下図との相違を比較対照することができる。この下図には、由一の手による文字や図を補足する朱筆が残っており、石版画を制作する上での注意点や修正後の変化などを読むことができる。さらに由一は山形滞在中、書簡と一緒に石版画用下図を東京の息子源吉宛に送っており、その中で製版上の配慮を具体的に指示している。従って、下図に書き込まれた朱書きや書簡から、下図は由一の自筆のものであるが、記念帖に納められた石版画は由一が直接描画したものでないことが判明する。それは、息子源吉や玄々堂の石版画工らが由一の描いた下図を模写しながら、描き起こして印刷したものであった。

以上のことは下図と記念帖石版画の大きさがそれぞれ縦16.6～18.0cm、横約24cmの寸法に収まり、ほぼ同型であることから証明される。下図をトレースした後、石版に転写して制作したのであろう。詳細に観察すると、石版に主要な線を転写した後は、リトクレヨンで石版砂目を生かして陰影や質感を描き起こしている。その描画は、卓越したものではないが、当時の画工レベルとすれば良質と言ってよい。印刷は紙本でなく絹本のため、台紙で裏打ちを施し、補強した後印刷を行っている。インクを乾燥させた後、絹本に彩色し、最後に蛇腹折りの装丁で仕上げている。これらの

職人による分業は、浮世絵版画、錦絵など伝統的な木版画印刷の職人技がまだ生きていた時代であったことと無縁ではあるまい。

印刷物としての記念帖から、油彩画とは趣の異なった水彩の軽やかさや透明感、柔らかな線描による奥行きが伝わってくる。記念帖の手彩色石版画と由一肉筆による下図とを比べると線の強弱や墨の濃さ、細部の描写において肉筆の下図の方が画質において優れていることは否定できない。いずれにしても伝統的な西洋絵画の手法を取り入れた下図と記念帖の画面は、安定感のある構図や空間の広がりによって明るい雰囲気を漂わせていることは両者にみられる特徴である。

また、写真術の普及の半ばにあった当時、写実的な画風による記録写真に似た石版画は、複製印刷を目的とした実用的側面において重宝がられたと言ってもよい。由一の写実的な画風や石版画に対する技術的理解が、時代的な要請と合致し記念帖は完成をみたのである。

以上のように由一の記念帖石版画を通して、明治初期の石版印刷を振り返ってみる時、由一のみならず画工と印刷技術の高さに改めて注目するものである。画家と石版印刷画工及び印刷職人の見事なコンビネーションと分業により、質の高い記念帖が出版されたのである。精巧なオフセット印刷機の普及していなかった明治10年代の石版画は、想像以上の水準を保持し、手仕事の技量の高さを示している。

注

- (1)柳源吉『高橋由一履歴』1892年、p.2
- (2)高階秀爾は『近代日本美術史論』において、嘉永年間は後年の記憶違いであり、文久年間(1861～1863)とすべきという説を述べている。
- (3)金井忠夫「東北旅行における高橋由一再考—写真とのかかわり、そして下絵・石版画を通して—」『西那須野町郷土資料館紀要第2号』、西那須野町郷土資料館、1985年、p.23
菊池新学は天童、若松寺別当新藏坊に生まれ。父常右衛門が江戸遊学中に写真術を身に付け息子の新学に伝授する。明治元年山形七日町に写真業開業。新学の孫、学治こと東洋は、オリエンタル写真工業(株)を設立する。照井泰四郎は、新学の弟子である。
- (4)薩摩出身の歌人で御歌所長、宮中顧問官を歴任、男爵。来県にあたり、明治14年6月24日付「高橋由一山形行二付拝謁願」の紹介状を書く。
- (5)山形、下長井時庭村(現長井市)出身、南画家。江戸で熊坂適山に師事。岡倉天心と交流し日本美術院の創設に尽くす。
- (6)西那須野町・尾崎尚文編『高橋由一と三島通庸—西那須野開拓百年事業』西那須野町、1981年、p.42
- (7)岡千仞(1833～1914)は、岡藏治の五男で伊藤四郎平の実弟。漢学者で維新後東京府学教授、東京府図書館長を歴任する。
- (8)柳源吉、前掲書。
- (9)仙台藩士岡藏治の三男として文政8(1825)年に生まれる。任務を得た時すでに60歳の老齢に達していた。
- (10)菊池新学の弟子として写真術を学び開業。子孫は、現在も山形市七日町「照井写真館」として営業している。
- (11)青木茂編『高橋由一油画史料』中央公論美術出版、1984年、p.13
- (12)序文、山形大学附属博物館蔵『三島県令道路改修記念画帳』1885年
- (13)柳源吉、前掲書。
- (14)小形利彦『三島道路完成記念帖』を通してみた高橋由一と三島通庸」、不明。